

らかにしている。そして、「マレーシアのイスラム教がどこから、いつ、どうして来たのか」という基本的問題をテーマに、ジャワやマラヤの伝承説話、アラビア・インド・中国史料はじめ種々の史料を用い、Samudra 王 Malik aş-Şâlih や ジャワ東部 Loran で発見された Fâtimah の墓碑銘、1902年発見された Trengganu stone の碑文など写真で紹介し、読解、注釈して考察し、すでに発表された多くの論文を詳細に再検討して結論を得ている。

すなわち、イスラム以前から南海交易に従事していたアラブ人、ペルシャ人交易者は、878年頃からマレーシア沿岸にムスリムの町を建て定住したが、彼らと共に来たイスラム教はまだマレー人には受入れられなかった。実際にイスラム教がマレーシアに定着するのは13世紀で、特に13世紀後半以降、スーフィ (Sûfi) の宣教範囲にマレーシアが入ってから Bengal を拠点にムスリム交易者 (アラブ人、ペルシャ人、インド人) やスーフィ布教者の大規模な改宗運動が行なわれてイスラム教が普及していったのであるとし、「どこから、いつ、どうして来たのか」という問いに、「Bengal から13世紀に、ムスリム交易者やスーフィ布教者によって」なる答を出している。そしてこの後、1414年、マラッカ国王がイスラムに改宗してから急速にイスラム教は普及し、一般化していった。1511年にマラッカ王国が崩壊してイスラム教普及の勢いも衰えるが、19世紀に入ってから民族主義的意識に支えられ、勢力回復への試みがなされこれが成功してきたという。

この結論は格別新しくもなく問題もない。ただ本書でマレーシアの概念が一定せず、時としてはジャワ、スマトラを含めてマレーシアとしている点注意すべきである。史料の選択にももう少し配慮が必要と思えるが、著者が用いた豊富な資料とその巧みな配置により、各章がひとつずつ問題を解いてゆくような面白さがあり、興味深く読ませるようになっている。マレーシアにおける、あるいは東南アジアにおけるイスラム教の研究入門書として、また研究資料として十分利用出来る書である。(梅田 輝世)

Teiichi Kobayashi. *Geology and Palaeontology of Southeast Asia*. Vol. I. Tokyo : The University of Tokyo Press, 1964. 289p.

本書は東京大学名誉教授小林貞一博士の執筆になるもので、東南アジアの地質および古生物にかんする学術書である。

第1章の Geology of Thailand では、タイ国の地形・研究史・古生代の層序・中生代および新生代の地質系統・地史について詳述し参考文献をも列挙している。

第2章の Palaeontology of Thailand では、1916年から1962年の間において発表されたタイ国にかんする古生物学的研究のすべてを網羅し、Cambrian から Quaternary までの地層中から発見記載された化石の全部を紹介し、参考文献をも残らず示している。

第3章は Contribution to the Geology and Palaeontology of Southeast Asia で、内容は17節からなり、1963年から1964年にかけて、タイ国・マラヤおよびベトナムの地質および古生物について、著者をはじめとしその主宰する12名の学者の研究内容を包含しているもので、これらの諸国の最近の研究を総括し紹介している。

要するに、本書は、従来の幾多の研究および最近における著者ならびにその主宰する研究グループの研究結果に基づいて、東南アジアにおける regional geology および palaeontology にかんする最古から現代にいたるまでの知識を与え、また、関連分野の参考文献のすべてを示したもので、この方面の研究者にとっては必読を要する著書である。(瀧本 清)

Withesakarani. *Yuk Thorarat*. Bangkok : Samnakphim Prachakhom. 1960, 744p.

本書は、全3冊よりなるタイ国現代政治史シリーズの第1冊目に相当する。本書の題は「暴君の時代」と訳せよう。このあとに Yuk Tamin (「暗黒の時代」) と Yuk Phadthanakan (「国家開発の時代」) の2冊が続く。

タイの中間層知識人の1932年革命以後の政治史にたいする関心にはなみなみならぬものとみえて、現代政治史に関する出版は後を断たない。それらの本にはつまらないものもあるが、参考になるものも少なくない。本シリーズは、構想の規模において、また、